

「消化管出血と緊急内視鏡検査」

編集 竹 本 忠 良 山口大学教授
鈴木 茂 東京女子医科大学教授

杏林大学教授

相 馬 智

Urgent endoscopy という概念は、最近では単なる新しい言葉としてではなく、多くの施設で実際に routine work として行われるようになりつつある。一時代前までは消化管からの大量出血時には、その疾患の診断はおろか、その出血部位が食道なのか、胃か十二指腸からなのか、部位の決定さえおぼつかなく、私達外科医は shock の治療に追われるだけで、何を目標に手術の計画をたてるべきか、手をこまねくことも稀ではなかったのである。

しかし最近では、この本の編者である竹本教授や鈴木助教授を中心とする進歩的な研究者の勇気と辛苦により、緊急内視鏡検査も確立されてきた。大量出血時でも内視鏡検査が行なわれ、診断が確定されて外科に送られたり、あるいは一時的にせよ内視鏡的止血により状態が改善されて elective に外科的処置が行なえるようになった。一時代前からみると

雲泥の差である。

ただ urgent endoscopy の厳密な定義は必ずしも意見が一致している訳ではない。本書にも述べられているごとく、種々の考え方があるが、症状発現より48時間以内という著者の意見には賛成である。

さて本書は総論ともいべき部分と、消化管の各部位別の各論ともいべき部分の10章から構成されている。各章は筆者が専門とし最も得意とする部分を受持って余すことなく述べている。

先ず歴史と現況では、内視鏡の発見から今日までの経緯がのべられ、特に panscope の生れてきた必然性がよく述べられている。緊急内視鏡の定義や機種選択の項は、初心者にとっては非常に親切な記述である。また消化管出血の原因疾患と頻度を内外の普く文献を引用して記載されていることは、本書が単なる緊急内視鏡検査の技術のガイドブック

ではなく、内視鏡を駆使してその疾患の根底を探るのだという著者の哲学が滲みでており深く感銘をうけた。

各論的には、食道、胃、十二指腸、小腸、大腸の各部位別とともに、消化管憩室よりの出血が特に章をおこして述べられている。これは最近日本人でも増加しつつあるが、外国勢を意識した編集のように感じられた。各項は、その手技と同時に、各疾患別にその出血病態生理や臨床病理学的事項まで詳述されており、消化管出血に関するすべてが記述されているといっても過言ではない。

最後に緊急内視と治療という項があり、食道異物、食道静脈瘤の出血予防策、出血、そして内科的範囲を逸脱した症例の外科的適応の決定まできめ細かに編集されている。一言欲をいわせてもらえば、止血法に関する記述がもっと欲しいが、200頁の本では無理な注文であろう。

いずれにせよ、本書は消化管にたずさわる内科医、外科医の必携の書であり、消化管出血に関する辞書ともなり得ると確信するものである。

B 5 / 頁206/図20/写真55/原色図64/
1977/¥13,000/〒300
<医学書院刊>